

スペシャルリスト
インタビュー

お話

寄席芸人

江戸家まねき猫さん

インタビュー：嵐山ゆりか 構成・編集部



2026年もたくさんさんの福がおとずれますように——そんな願いを込めて、新年号は江戸家まねき猫さんにご登場いただきます。猫耳ヘアと明るい笑顔、本物もビックリの動物ものまねで、お客さまに福をくばっているまねき猫さんにお話をききました。

——皆さんに笑いを届けるお仕事ですが、ふだんから心がけていることはありますか？

たのしいことが大好きです！ ふだんからとにかく全てを笑いつなげますね。失敗したり、嫌なことがあったら、どつネタにつなげるかを考えるのがクセになっています。もちろん笑えないものもあるので、そんなときはふか——く心にしまいます(笑)。

——それは失敗も怖くなりませんか！

そうです、失敗は何よりのごちそうです。「話す」ということは自分から「手放す」

——どうやって解決したのですか？

たまたま兄と一緒にの仕事があつて。兄が「おまえ、どういうふうにかえているか知らないけど、俺たちのやっていることは、初代江戸家猫八のおじいちゃんの創り上げたものをお借りしてるんだぞ」と言われたんです。普通なら背筋がシャキッとすると言葉ですが、私、それを聞いたときに、「ああそうか!! おじいちゃんのものなんだ！」ってすごく気が楽になったんです。私の芸がいくら下手くそだって、おじいちゃんの名前がついたからその名前に傷がつくことはないじゃないか。だったら私は一生懸命やればいいじゃないか！ って。

江戸家まねき猫

1967年東京生まれ。落語芸術協会会員。都内の定席をはじめとする寄席の高座に動物のものまね芸で出演。女優、ナレーター等としても活躍している。時代劇「鬼平犯科帳」で五郎のおとを演じる。同番組では父の江戸家猫八(三代目)も相模の彦十役で出演。兄は四代目・江戸家猫八、五代目は甥東京・上野で「動物ものまね教室」(お江戸芸・邦楽スクール)を開催中。

公式HP
<http://www.edoya-manekineko.com/>

ことなので、失敗話なんかも笑って手放す。でも話せばなくなるので、どんどん日常に興味を持って新しいことを補充しないといけない。だから嫌いや苦手は逆に「キツカケ」になるんですよ。

「なんで嫌なのか、苦手なのか」を考えてみると、嫌いなことが好きになったりする。がんばってみるとできるようになることってありますよね。どんな小さなことでもいいんですよ。

——もともとは

俳優志望だったそうですね。

兄が父(三代目江戸家猫八)の芸を引き継いでいたので、芸人になることは全く考えてなかったんです。漠然と「お父ちゃんのお芝居の部分を引き継げたらいいな」とは思っていました。父の付き人をしていた関係であるとき寄席に出るようになって、それならば落語芸術協会に所属してないということ、父は私を急に芸人の世界に放り込んでしまったんです

よ。困っちゃったなあ〜と思いました。どうにか父に恥をかかせないように辞めなくちゃいけないなど。

——それでも

芸人をやめませんでしたね。

芸人をやっていたおかげで父の弟子として認められて、テレビの「鬼平犯科帳」に出させてもらったことが大きかったですね。世の中の役者さんがどんなに苦労してなっているかなんて、これっぽっちも考えないままに、出演できたことで恥ずかしながら有頂天になりました。でもじゃあこれから芸人としてどうしたらいいんだろ? とそこからすごく悩んでしまつて……。

祖父の初代・江戸家猫八には会ったことはありませんが、明治時代からずっと続いている芸だということはものすごく意識していました。だからこそ、先のことを考えたら怖くなつちったんです。

私は画かきになろうと思っていなかった。
 ほんのキツカケが私を画かきにした。
 そのほんのキツカケがなかったら、私は何になっていたろう。

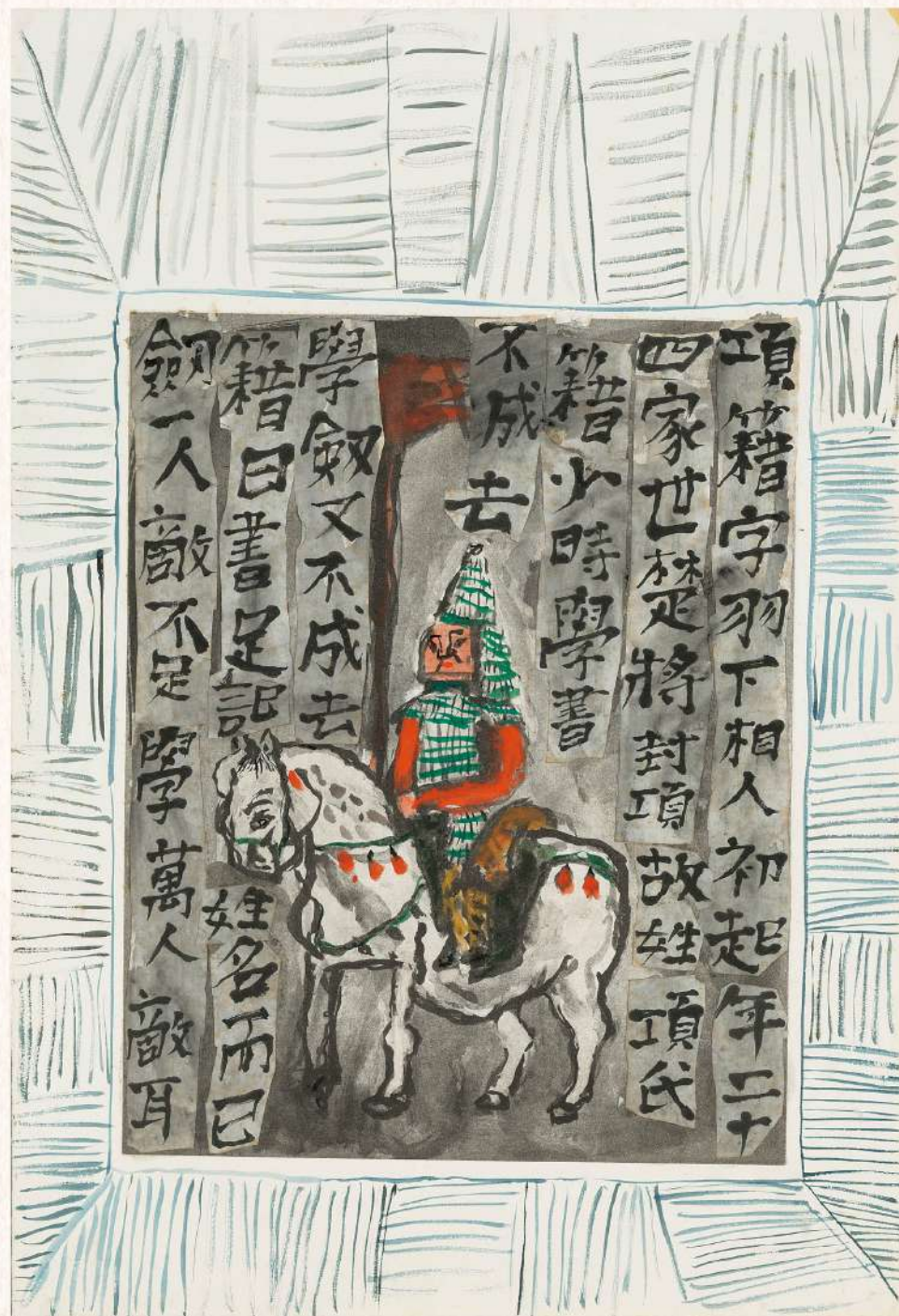
特集

中川一政

自分の滋養を探す

Nakagawa Kazumasa

また新しい年がはじまります。暦が変わっただけと普段通りもいいけれど、せつかく変わったからには心機一転、新鮮な気持ちと呼び起こしてみませんか？ 小池邦夫が師と慕った一人、中川一政が89歳になる年の初めに書いた「新年に思う」からヒントをいただきましょう。



項羽 オリジナルリトグラフ 1980年 81.3×56.4cm

司馬遷『史記』の項羽の記述を書いたもの。少き時、書を学んでも剣を学んでもうまくいかなかった項羽を叱った、親代わりで叔父の項梁。項羽は、書は名前が書ければいい、剣も一人の敵に対するものだから学ぶ必要はないと返した。一政87歳の作。



荻木恵子(大阪)
感謝の気持ちを忘れない1年にしたい。



鳥越美保子(福岡)
毎日1枚と決めて、絵手紙をかってSNSに投稿を続けています。10月27日現在で1018枚。2026年も頑張って投稿します!



鈴木民江(74歳・静岡)
たんぽぽの会1年過ぎ、新しい種で絵手紙体験2回目。さあ風に乗って2つ目のたんぽぽの会へ、種まきを始めるよ。



佐野喜代子(兵庫)
公認講師の資格をとって絵手紙教室を開き1年が経ちました。少しずつ成長した足跡展を春にしようと希望に燃えています。

ひろば

読者投稿

かいて、送って、みんなでおしゃべり

テーマ「新しい年へむけて」

さあ、深呼吸して気持ちを整えて、新しい年をスタートしましょう

・自由絵手紙 ・なんでも100字 ・活動報告



鴨川悦子(福岡)
通勤路に昨日までなかったピンクのじゅうたん。上を見ると薔の花、謎がとけました。気づきと感動の1年にしたいです。



石毛映子(72歳・栃木)
今年はたくさん美術館へ出向きたいです。

初心から学ぶ『ヘタでいいヘタがいい』

絵手紙教室

月刊誌を使って
好きな時に好きな場所で
学んでいきましょう

小池先生との思い出

小池邦夫からの絵手紙 #13

生涯絵手紙の種を撒き続けた小池との交流の思い出をご紹介します。
好評につき復活、不定期でお届けします。

あの日のひと声でブラジルへ

峯 みね 誉 たかし (大阪)

今、ブラジルでは絵手紙が、俳句・短歌・書道・茶道と同様に日本文化として定着してきています。始まりは2010年。ブラジル在住のあなたに「絵手紙をかいてみたい」と頼まれて、絵手紙仲間のご夫妻と一緒にブラジルへ。あちこちの絵手紙の集まりに参加し、ゆっくりかいて素直な気持ちを表現するなどの絵手紙の大切なことを必死で伝えてきました。

その3年後、もう一度、訪伯の依頼が。行きたい気持ちはあれど地球の裏側。色々な面でためらっていました。ちょうど小池邦夫先

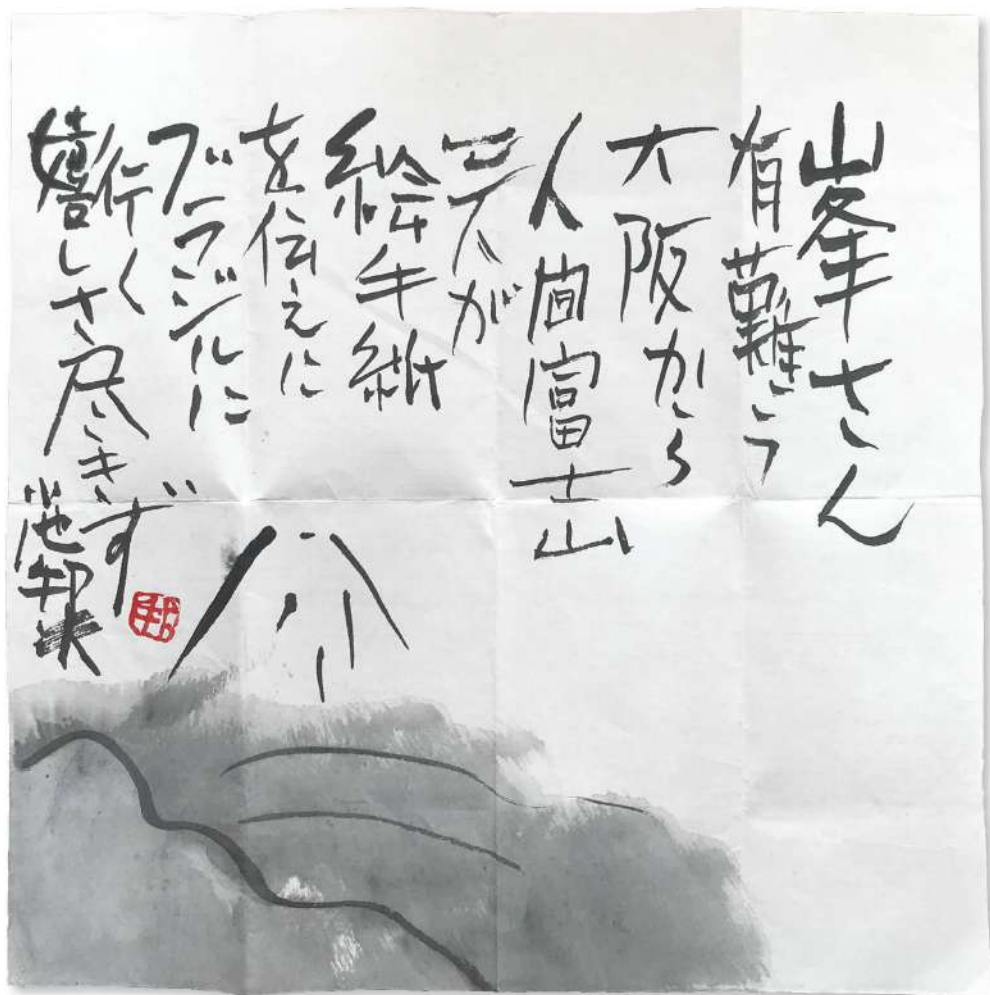
生の展示を見に伯江を訪ねた際、思い切って相談すると先生はひと言、「行ってこい。峯さんのやり方で」と。踏ん切りがつかしました。同じメンバーで再度ブラジルへ。サンパウロ空港には前回の仲間が多く迎えてくれ、絵手紙の熱さを実感。20万人が集うと言われる「日本人祭り」の絵手紙ブースは大盛況。日本語学校、日本人学校、絵手紙同好会、新聞社等も訪問し、絵手紙の広がりを感じました。現在、絵手紙のリーダーの高齢化や、言葉の壁(母国語がポルトガル語)に負けず、二世・三世の若手が少しずつ育っています。これからも「ブラジル絵手紙」が日本文化として広がっていくことを願っています。



上・2013年、ブラジルで絵手紙を教えた時の様子。
ブラジルを漢字で書くと「伯刺西蘭」となる。
右・峯さんと現地の子どもたち



小池から峯さん宛



小池邦夫が峯さんへ送った絵手紙(2013年)

「小池先生に何度も絵手紙で励まされ応援され成長してきたブラジル絵手紙の今を、皆さんに知ってもらいたいと思っています。あの時先生の「行ってこい」がなかったら、日本との繋がりも、ブラジルでの絵手紙の広がりも、今のようには太くなかったはずですよ。」(峯)

こいけ・くにお

絵手紙の創始者。1941年(昭和16)愛媛県松山市生まれ。19歳より絵手紙をかき始め、「ヘタでいいヘタがいい」をモットーに絵手紙文化を広める。その活動が評価され、東京都柏江市初の名誉市民に選ばれるほか、文化庁長官表彰など受賞も多数。2023年8月31日82歳で永眠。

【募集】「小池邦夫からの絵手紙」とエピソードをお持ちのかたはぜひ編集部までお寄せください。小池邦夫
*投稿はまずはなるべくカラーコピーでお送りください。掲載が決まった際には絵手紙、写真の実物をお願い

と写った写真もあれば大歓迎！
する場合があります。投稿の宛先と注意事項は76頁へ。